

スイス 音楽物語

期待が高まった クルレンツイスの登場

コロナ危機がなければ、4月1〜4日はルツェルン音楽祭(春)の「テオドル」でクルレンツイス三昧に浸るはずだった。いまや全世界に周知される指揮者となったテオドル・クルレンツイスだが、2016年4月、チューリヒ歌劇場へのデビュー公演は、昨年引き続き今年の来日公演でも共演予定だったパトリツィア・コパチンスカヤ(VN)との出会いを作った歴史的公演だ。バルコニー席で聴いていたコパチンスカヤがクルレンツイスの演奏を気に入って、彼に目で合図したのが始まりだ。すぐに意気投合した二人は、昨年日本でも披露され

たチャイコフスキー「ヴァイオリン協奏曲」を録音するなど、芸術的関係を構築し続けている。

2016年4月10日、隣国の歌劇場総裁やエージェント、ロシアの音楽業界人たちが集うチューリヒ歌劇場は、期待で膨らんでいた。しかし、バロックからモーツァルトまでのオペラで注目され始めていたクルレンツイスが、ヴェルディ《マクベス》を、手兵のムジカエテルナではなく、イタリヤ・オペラの伝統も持つフィルハーモニア・チューリヒ(歌劇場のオーケストラ)を指揮して、どれだけ

テオドル・クルレンツイス——新たな伝説の始まり

個性が出せるのか、個人的には半信半疑だった。パリー・コスキーの演出もヴェルディの音楽の許容範囲を超えるのではないかと、ハラハラして見守った。

麻薬的な音楽

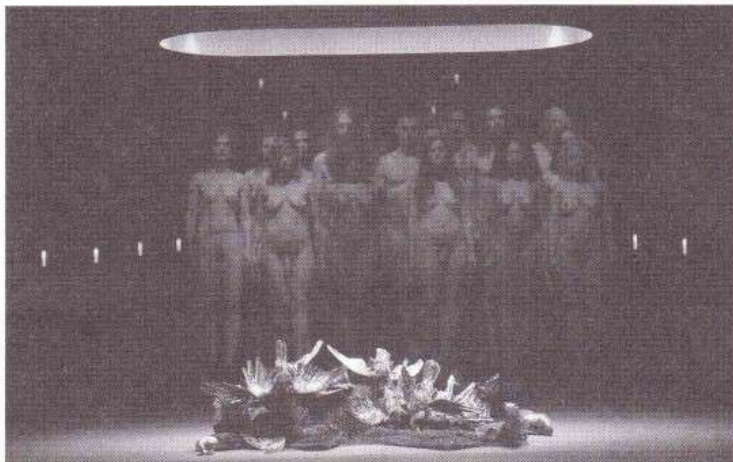
舞台上にはカラスの死骸、両性具有も混じる裸の合唱団に、最初は音楽的集中力を阻まれた。舞台の上方奥まで遠近法的に並ぶランプは、広くない舞台に闇の奥行きを与え、合唱団の裸体をスクリーンとして映される映像などで非現実的な魔女の世界を表現する。鋭い金管楽器や

からなくなってしまうほど引きずる。マクベス夫人のタチアナ・セルジャンは、シンコペーションを効果的に使い、満足なアリアを聴かせた。子音を鋭く際立たせた合唱もスリリングだ。このときはまだ、これがクルレンツイス特有の合唱の「利かせかた」だとは知らなかった。合唱団に加えてエキストラにも子音だけ発音させているのではないかと思ったほど新鮮だった。

バンクオーとマクベスの二重唱では彼らのユニゾンとオーケストラがピツタリと合って、室内楽のような精巧さを聴かせる。中国人バスのチャン・ウエンウェイは自己主張が過ぎることもある歌手だが、クルレンツイスの棒では抑えられ、リリックな声が生かされていた。

ふだんの音とは違う硬質なクラリネット、縦割りの小節線を感じる短いフレージングと速すぎるテンポで挑戦的な「序曲」は、伝統的ヴェルディを期待する耳には違和感を与えるが、エキサイティングではある。

題名役は、この日から、初日のキャストだったマルクス・ブリュックからディミトリス・ティリアコスに代わったためか、ピタツとはまっていない印象を受けたが、レクタティヴォは上手い。魔女との交信など、最適な表現でテンションを上げていくのだが、朗々と歌う部分ではレガートと勘違いしているのか、どの音を歌っているのかわ



舞台上のカラスの死骸と、その後ろには両性具有も混じる裸の合唱団。衝撃的なコスキーの演出はクルレンツイスの音楽とあいまって、話題となった。2016年のチューリヒ歌劇場《マクベス》から ©Monika Rittershaus

スイス
NOW

新型コロナウイルス
関連情報

6週間にわたる行動制限

スイス連邦政府は3月13日に行動制限措置を発表し、100人以上集まるイベントを4月30日まで禁止したため、歌劇場やコンサートホールは閉鎖された。その100人が50人になり、最後は6人以上の集まりすら禁止された状況のなかで、チューリヒ歌劇場は公式ホームページ(opernhaus.ch)上で過去の公演の無料配信を始めた。今号の発売後だと、5月21～24日にマスネ《ウェルテル》と5月29日～6月1日にヴェルディ《リゴレット》が観られるほか、バレエ付きのヴェルディ「レクイエム」による《Libera me》は、arte.tvで7月8日まで鑑賞できる。

チューリヒ・トーンハレ管弦楽団は、公式ホームページ(tonhalle-orchester.ch)上で有料ストリーミングサービスのIDAGIOに登録すると、1カ月間無料で過去の演奏を聴けるようにした。トーンハレ管の本拠地であるコンサートホールは現在改築中だが、工事計画の見直しや作業の遅れにより完成が1年延期され、2021年3月と発表されていた。しかし、この行動制限措置による工程の遅れで、柿落としては21年9月に再度延期された。

6週間にわたる行動制限の効果により、4月27日から3段階に分けて制限は緩和される。第1段階として美容室や花屋、歯科や理学療法などに加えてテニスやゴルフ場も営業を再開する。第2段階は5月11日から義務教育機関と非生活必需品の販売が再開され、6月8日から第3段階として高等教育機関や美術館、動植物園や図書館が開かれる予定だ。飲食店やイベントは再開方針検討中ということで、6月5日から始まるチューリヒ・フェスティバルの行方が案じられる。



チューリヒ歌劇場も配信を始めた ©Opernhaus Zürich

弱だけで扉の開閉や奥の様子を想像させるので、視覚化されるよりリアルだ。マクベス夫人がスタックカートでアクセントを強調し、効果的にそのかすと、マクベスが怖れながらも野心を膨らませていくところが細かい音符で表現され、コスキの演出効果とあいまって高級な心理サスペンスに仕上がっている。ただ最後はアクセントが強すぎて、弱音の音楽が凹んでしまった。

第2幕、バンクオーの亡霊が見えたマクベスはどんどん音楽を走らせてしまつたが、繰り返し部分では巧みにそれを修正しピタッと合わせた。すると同じメロディとは思えないほどの効果を生み、マクベスが狂気に堕ちていくさまを駆け抜けるように歌いきった。

第4幕のマクドゥフのアリアは、パヴォル・ブレシリクが鼻声に逃げながらも繊細な表現で、室内乐的なクルレンツイスの《マクベス》に合う歌唱を聴かせ

たが、マルコムのアイラム・エルナンデスが登場すると、マクドゥフがかすむほどすばらしい。エルナンデスはその2カ月後には、クルレンツイスが芸術監督を務めるディアギレフ・フェスティバルのヴェルディ《椿姫》のアルフレードに抜擢されていた！

最後の場でのマクベス夫人も出だしは声が掠れたが、最後の高音まで美しかった。マクベスのアリアも細かい表現が引き立ち、歌曲のようなアプローチで歌いきった。コスキ&クルレンツイスの《マクベス》は現代版暗殺劇として最高のプロダクションだろう。このあとクルレンツイスはモーツァルト《後宮からの誘拐》の契約を得るのだが、リハーサル開始時に病氣という理由でキャンセルしたのが残念でたまらない。

コパチンスカヤは語る

今年春のアジア・ツアーに出られず

に、現在スイスの自宅で過ごしているコパチンスカヤに近況を聞いた。

「クルレンツイスと、彼の天才的な音楽家たちと日本に行けなくなったのはとても悲しい。愛する日本で、友達や聴衆に会えるのはハイライトだったのに……でもいまはストレスフリーで、本を読んだり、娘とおしゃべりしたり、お料理にもトライしているの。いままでい



元気な様子のコパチンスカヤ

つも旅していて、外食だったから。ブラームスの協奏曲やJ・S・バッハのソナタを勉強したり、ピアノを弾いたり、何年ものブランクを経てやっと作曲を再開したり。私もふくめ、多くの音楽家たちにとって、魂のレヴェルに戻る静かな時間をとって、静寂と美に焦点を当てるのは利点もあると思うわ」